

2010.3.18(木)



徳大病院長に就任する



国立大学が法人化されて以降、国からの交付金が減り、大学病院経営が厳しさを増す中で病院長に就く。

「今以上に経営の効率化が必要。経営を安定させ、医療、教育、研究の強固な3本柱を持つ病院にしたい」。時代の要請にマッチした病院づくりに強い決意をにじませる。

専門は生殖医学。産婦人科教授として学生の教育と患者の治療に当たる一方、2003年に副病院

長に就いてから病院経営にも携わっている。周産母子センターに、重度の妊娠中毒症や切迫早産などリスクの高い患者に対応する集中治療室を新設。本年度からは、院内に医療支援センターを設け、医事業務やカルテ管理の効率化に力を注いでいる。

教授職との兼務は今後も続く。「多忙なのは承知の上。現場の隅々にまで目を配り、現場の声を病院経営に生かしたい」

周囲の評は「気配りができ、実行力がある」。患者と接する際に心掛けていることは、専門用語を

みのもろ
原 稔さん
苛原

使わずに平易な言葉で話し、意見をよく聞くこと。「一人一人抱える問題や背景が違う。相手の思いをくみ取ることが大切」と力を込める。

孟子の言葉「道在邇」が座右の銘。「道は身近にある」という意味で、目の前の課題を解決することが目標達成への道になると信じている。「理想の大学病院像の実現に向けて、できることから着実に進めていく」。新外来棟の完成、医師がさらに専門性を身に付けるための教育機関の設置、高度先進医療による地域貢献の三つが、病院長として歩む最初の「道」という。

趣味は読書。出張などの移動中は必ず本を携える。中でも歴史小説が好きで、時代を問わずに読む。「過去の出来事から今を学べるのが一番の魅力」。患者や学生らと、歴史について語り合う時間を大切にしている。

美馬市出身。徳島市伊賀町で内科医の妻(55)と医学部生の長女(19)との3人暮らし。56歳。